山中順子写真展

港ヨコハマに深い感動の風

写真、映像、唄、語り、食…

深く、多彩な奄美を表現

「永遠のマブライ
―群島・奄美の世界観」

奄美を撮り続けている写真家山中順子さん（三七）の写真展「永遠（とわ）のマブライ―群島・奄美の世界観」が、このほど横浜市で開かれた。青い月明かりと写真で構成した空間にシマの聖地を作り、映像や島唄、舞い、語り、食など多彩なイベントを盛り込んで多様かつ深い奄美の世界を表現。訪れた港ヨコハマの観客に感動を与えた。

写真展は五月三日から十一日まで、横浜市の中心街にある「ZAIM」（財務）であった。テーマの「マブライ」は、徳之島に残る「自然の神々に守られ、祖先に導かれて今の恵みがある」という考え。

会場は月明かりを意味する青で統一され、七十点の写真で長寿、食、産業、ユタ（シャーマン）、トゥール（古墓）、祭り、聖地など九つのコーナーを配置。正面の壁には満月の夜に撮った立神の写真（縦一㍍、横三㍍）。

中央には奄美から取り寄せたサンゴの石垣や白砂、野草でグンギン（神石）を造り、その周辺を歌や踊りのステージとした。

独自に撮影した映像も常時上映されたほか、加計呂麻島で撮影したディゴの老木を横二㍍、高さ三㍍の特大プリントした写真が人目をひいた。さらに、「島のカフェ」としてトーグラ（台所）のコーナーも設置。うこんキビ酢、黒糖菓子、黒糖焼酎、よもぎもち、ミキなどが観客に振る舞われた。

ステージでは、加計呂麻島出身で横浜在住の唄者朝崎郁恵さんが島唄を響かせたほか、朝崎さんが主宰する十五夜会のメンバーが八月踊りや六調を披露。観客も入って、会場は奄美一色に染まった。

また、奄美の文化との新たな共演として、女優の小川知子さんの語りや女優でダンサーの更紗さんの踊り、国内外で活動している津軽三味線の久保田祐司さんの演奏もあった。

山中さんは、二〇〇〇年から「生命」をテーマに奄美各島に通い続け、百歳の長寿者や新生児を中心に撮影している。最近は長寿者が暮らすシマの環境、島人の身の置き方、古くから伝わる考え方などシマの深みや多様性を撮り続け、独自の企画と構成で新たな奄美を発信し、注目されている。

天井からつるした横2㍍、高さ3㍍の巨大な写真で観客を引きつけた山中さんの写真展。会場は、月明かりを意味する青で統一された

会場の中央にはシマの聖地（グンギン、白砂）が作られ、島の草を敷きつめて会場いっぱいに野の香りを漂わせた。

奄美の歴史を演ずる山中さん、久保田さん、小川さん（左から）

島々の長寿者の写真が微笑む会場の受付

奄美大島から届けられたサンゴの石垣と白砂、草でかたどられたグンギンを前に島唄を熱唱する朝崎郁恵さんのステージ「月のミハチガツ」

写真とともに会場の片隅には島の砂と草に包まれたイビガナシ（集落の守り神）が設置された

シマについて語る朝崎さん（右）と山中さん（左）

朝崎郁恵さんが会主を務める横浜の十五夜会も八月踊りを披露した

会場には奄美の食と香りが振る舞われた

多くの人々が詰めかけた写真展

「生命を生きることの深み」を学んだ奄美

「永遠のマブライ」展を終えて

――山中　順子

私と奄美の最初の出会いは浜の潮風に含まれている波の音、シュナリ（潮鳴り）でした。奄美で生きる方々にとってシュナリの音は生まれてから亡くなるまでずっと傍にある記憶の音なのでしょう。

横浜で生まれ育ち、ハマっ子の私にも潮の風が寄り添っています。多様な人や文化、情報が混ざり合う港ヨコハマで異国の文化と触れ、他国の方々と交流するハマの自由さが身体に沁（し）み込んでいるからなのでしょうか。十代は湘南、グアム、沖縄。二十代はハワイ、与論島、香港、オーストラリア、シアトル、ニューヨークなどアメリカを中心に旅をしました。

一番の長旅はマイアミからルート10号を走り、ニューオーリンズ、メキシコ、赤に染まる雪のグランドキャニオン、ラスベガス各地を回ってロス、サンタモニカまで二カ月近い車の旅でした。その他、シンガポール、フィリピン、ドミニカ共和国、カリブ海などさまざまな土地を巡りました。二十代後半はタイの寺院や宗教心に触れ、アジアの生命感を感じる旅をしていました。

そのころは、写真家になろうなどとは一瞬たりとも思わず、趣味の域にも達していませんでした。写真は撮りませんでしたが、各地への旅で感度を広めたことで、肉体のシャッターで一瞬を切り取り、全て記憶の倉庫にしまって熟成しています。

写真家として、二〇〇〇年から「生命」をテーマに、奄美群島の百歳以上の長寿者や沐（もく）浴、新生児など、奄美の精神世界、聖地、祭り、シャーマン、暮らしなどを撮り続けてきました。それは身体に響く場所、人、シマに潜む言葉に触れる旅でもありました。

奄美に出会う前から、響いた場所には出向いていましたが「こころの帰る場所」が見つからないでいました。また、写真家を名乗りながら自身の感性は「写真の域」にとどまらず、映像、絵、音楽、詞、香り、味、手作りなどに響いていて、表現の形にこだわっていないと思いつつも写真を通じてエンターテインメントの仕事をしていました。

そうした中での奄美との出会い。奄美が心の眼（故郷、母）となって、死生観や生命（いのち）を見ている、そのことに響き、抱（かか）わりをもっている、いのちを頂き、死を迎えることが本当に美しいことだ、と感じさせられました。

徳之島で「マブライ」という不思議な響きのある言葉に出会いました。自然の神々に守られ、祖先や親に導かれて、他者の方々の導きで幸や恵、生きる喜びを頂くという考え方です。他者をはじめ、生命ある万物に感謝し生きる人をマブライムンと言う、と。

心の根に響く言葉でした。その言葉が持つ意味の深さを知りたいと思うようになり、さらに奄美へ通い続けました。マブライの世界観を記した徳之島町徳和瀬集落の民俗研究家・松山光秀さんに会いに行きました。しかし、松山さんは急逝（せい）されていて、奥様にお話しを聞くことにしました。徳和瀬の集落や祭りの浜、墓、千瀬とイノーの浜などを歩きました。

やがて、マブライの記憶の色は「青の刺しゅう」となって焼きつき、自然も人も全てはつながっていることを、知識としてではなく、身体の記憶として学びとることができました。奄美に触れた者の一人として、この世界観を私なりに確かに伝えたいと思いました。それが今回の「永遠のマブライ」です。写真、映像、音、空間、私自身に寄り添った記憶の数々を表現してみました。奄美という多様で深い群島で私が頂いた、たくさんの導きや恵、生命感を現代人の内面に添え、いつの時代にも色褪（あ）せない深い眼差しや身の置き方をお感じになっていただきたい、皆さんに永遠のマブライがありますように、そう願って「青」の空間をつくりました。

出会いの一瞬に感じたものは、時間に醸成された後に、やがて「ああ、そうだったのか」と私の内に入ってきます。「後つながり」です。おそらく、この積み重ねが私の世界観となっていくのでしょう。

「私とは何か、どこへ行くのか、私は何のために存在しているのか、私はどこへ帰るのか」。まだつかめないでいますが、これからもマブライが秘めている世界観を追求し、表現してゆきたいと、深く思いを奄美に寄せています。

どんなに遠くにいても、いつでも一緒にいてくれる奄美。あなたはあなたのままで素敵だよって言ってくれている奄美。私が私になれる場所に出会えたことが、生命を生きる喜びになっています。

「joy of life 生きていること、私の人生の喜び」。「Maburai… blest and guided by ancestors and the many gods of mother nature.（ご先祖様と多くの導き、母なる自然の神々によって授けられ、導かれたマブライ）。